

黙示録の記録

第3章 誘惑の時

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

序章 未来をひもとく書

第1章 栄光のうちにある人

第2章 しみやしわやそのようなもの

第3章 誘惑の時

第4章 御座の周り

第3章 誘惑の時

教会史

すでに記したように、教会史と黙示録の2章、3章にある七つの教会への手紙との間には、確かな対応のしるしがあるのです。事実、この預言的解説が、しばしばこれらの章の本来の意味と受け取られており、ヨハネの時代から教会の携挙までの時代の歴史をカバーしていて、すべての書はこの一つのテーマを展開しながら書かれています。

しかし、この解釈の問題点は、これらの手紙が教会史の七つの時代のアウトラインを書くことを意図していることと聖書自体が示唆していないことです。それゆえに、いくらよく見ても、これは単にたまたま起こった二次的な意図であったはずで、その全体的構成は、黙示録の残りの部分で確かなように、預言的構成ではなく、単なる勧告です。宛先の教会は、みな実在した教会で、すべてヨハネが黙示録を書いていた当時、活

躍していました。前に指摘したように、七つの選ばれた教会に対する七つの部分からなるメッセージの象徴的意味は、ただ、これらの教会は、すべての民族とすべての時代にあるすべての真の教会の代表ということ。個々の教会に対するメッセージは、各々の教会にとって適切です。「耳のあるものは御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」は、各教会の一人一人の読者に対する勧告なのです。

一方、預言的解釈が本来の解釈ではないとしても、二次的に預言に当てはめることは可能と考えられます。預言的面は、それらが起こる前にその出来事を読者が予測できるほど確かではありません。それでも、読者は、実際に、過去を振り返って、いくつかの歴史的対応を見出すことが出来ます。次に挙げられている大雑把な相互関係のように幾つかの一致が見出されます。

■教会に対する手紙	■教会史の時代
1、エペソ	使徒の時代 AD 100年以前
2、スミルナ	迫害の時代 AD 100年～AD 313年
3、ペルガモ	国教の時代 AD 313年～AD 590年
4、テアテラ	教皇政治の時代 AD 590年～AD 1517年
5、サルデス	宗教改革の時代 AD 1517年～AD 1730年
6、フィラデルフィヤ	宣教の時代 AD 1730年～AD 1900年
7、ラオデキヤ	背教の時代 AD 1900年～ ?年

各々の教会について記された状況と、教会史上それに対応する進展との間に類似点を示せるのは確かです。同時に、注解者たちは、その解釈に当たって実際以上に一致を人々に納得させようとして、しばしば、本気でその聖書の部分の意味を曲げてきました。

主イエス・キリストが、ある論理的順序に七つのメッセージを配列したと考えるべきです。なぜなら、キリストは「混乱の神（創造主）ではない」[「コリント人への手紙14章33節」]のですから、気まぐれなところは何もありません。したがって、メッセージの順序は、論理的で地理学的順序に配列されています。七つの都市は、ヨハネが最初にメッセージを聞いたパトモス島に最も近い都市で始まり、時計回りに巡っていきます。しかし、その順序は、世界中の教会に、その後起こる色々な運動と問題が、どのように進展するかを、先見の明を以って知っておられたキリストが選ばれた可能性は確かにあるのです。

しかし、これらの七つの使信を、このように預言として当てはめるのは、少なくとも決定的ではありません。そして、キリストが直接このように当てはめなさいとの要求も、示唆もしていません。ですから、黙示録研究によって文字通りのアプローチをし、預言をあまり強調すべきではありません。けれども、このような記述は、元来宛てられた特別の教会だけに当てはめるべきだとは決して示唆されていません。七つの教会の真中を歩かれるキリストが見通しておられたことは、このメッセージはすべての時代のすべての教会に宛てたもので、あるメッセージは他の教会よりある教会へ、そして、おそらくあるメッセージは他の時代よりある時代に当てはまると結論してよい十分な理由があるのです。

そのメッセージは教会時代の終わりに当てはめようとしていることは、いくつかの箇所で見出され、少なくとも、キリストの差し迫った来臨が、ヨハネの書簡に述べられている事実から明らかです。このことは、

特に終わりの四つの教会への手紙であるテアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤにとつて真実です。黙示録の3章は、七つの手紙をこれらの最後の三つの手紙で締め括くくっており、いわば、すべては、「地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時」〔黙示録3章10節〕、すなわち、来るべきさばきの時・大患難の危険について書いていたのです。

死んだ正統派教会

黙示録3章1節　また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神（創造主）の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知ってる。あなたは、生きていとされてい

るが、実は死んでいる。』

サルデスは裕福な都市であるとともに邪悪な都市で、クロエソス王とイソップの故郷である古代リディアの首都として有名です。サルデスはテアテラの南東（一四八キロメートル）に位置していました。サルデスにはなおその遺跡は少しありますが、大部分は五百年頃までに荒廃してしまいました。

サルデスに宛てた手紙には、サルデス教会について特別の賞賛のことは何もありません。教会がかつてどうであったとしても、はじめの熱心さと霊性のなごりをとどめていただけでした。教会が死んでいるというのは、おそらく、主がご自身を創造主の七つの御霊（すなわち遍在ですべてを見ておられる聖霊）を持ち、七つの星すなわち七つの天使を持つお方として見ておられることによるのです。教会はおそらく教会に仕え

る天使の守護と共に、聖霊の生命いのちを与える生き生きした力を必要としていたのです。

サルデスの教会は、かつてキリストを讃たたえる強い教会として知られていました。彼らはなおキリストの名を用いており、表面的にはキリストの教会でしたが、生命いのちはなかったのです。教会員の多くは確かにクリスチャンと自称していましたが、真に回心こんしんしていたのではなく、ただ宗教活動をしていたに過ぎません。また、この立場は悲しいことに、今日の多くの教会にも見られることです。

黙示録3章2節　目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが創造主の御前に全うされたとは見ていない。

前に挙げた四つの教会は、それぞれある種のよい働きの故に、キリストの賞賛を受けていました。しかし、サルデスの教会は賞賛に価すると認められる根拠は何もなかったのです。いくつかのわざは、一見よく見えるようでも、そのときでさえ、動機が悪かったため、人には感銘を与えたかもしれませんが、創造主には評価されなかったのです。

しかし、サルデスには、真の信者で、本気になって証あかしをしつづけようとしている人々が幾人かいました。明らかに、彼らは落胆し、あかしをやめようとし始めていたのです。すなわち、彼らが生活していた創造主を敬わない環境と、彼らが奉仕していた致命的教会は、共に死につつあったのです。

サルデスで残りの者であるこれらの者は、「目をさましなさい」と警告されているのに注意して下さい。言外の意味は注意深くせよということですが、死にかけていて、習慣的に宗教行為をしている者に対する治療は、

キリストの来臨が差し迫っていることに對して目をさまし続ける事です。だいぶ前のことですが、キリストは弟子たちに「目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか知らないからです」「マタイによる福音書24章42節」と話されました。

黙示録3章3節 だからあなたがたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守りまた悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。

約束されたキリストの来臨は確かですが、来臨の時はわかりません。手紙が書かれた当時、サルデスで生活していた人々が生きているうちに起こり得たのです。時は過ぎて、その時生きている世代の人々の時に、キリストが帰ってこられる可能性は、ますます大きくなっていて、信者にとってキリストの来臨を見張ることはより差し迫った問題となっています。「主の目が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。……しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありあません」「エテサロニケ人への手紙5章2、4節」。クリスチャンが注意してよく考えなければならぬ最も悲しい事態のひとつは、キリストが再び来られる瞬間に、キリストが恥辱とする何らかの行動をしていて「その来臨のときに御前で恥じ入る」「イヨハネの手紙2章28節」ことです。

このように、死んだも同然な教会にいるクリスチャンたちは、キリストの再臨の真实性に目覚めるだけでなく、彼らの回心、すなわち彼らがキリストを受け入れ、キリストの御声を聞いた時にも振り返って見なければなりません。これら的大いなる真理に對して、彼らはしっかりと守り、靈的無関心さを悔い改めなければなりません。

黙示録3章4節 しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。

恵み深い主は、ソドムの時のように、「救いの衣」「イザヤ書61章10節」が本物であったわが僅かの者をさえ喜んで認めてくださった。彼らの名は、なお、いのちの書にあり（次の節を参照）彼らの「衣を小羊の血で洗って、白くしたのです」「黙示録7章14節」。彼らが価値ありとされるのは、彼ら自身の行ないによるのではなく、主キリストにあってでした。彼ら自身の行ないは、創造主の前に不完全であると宣言されていました【黙示録3章2節】。主だけが本当にふさわしい方です【黙示録4章11節、5章9、12節】。これらは小羊との婚姻に含まれるはずです。キリストの真の花嫁に對して、「光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ない」【黙示録19章8節】であると認められるのです。小羊の贖いの血を信じる信仰を通して永遠の生命を実際に与えられている人々は、もちろん、彼らの贖われた生活で、よい行ない、すなわち、「聖徒の正しい行ない」の証拠を実例で明らかにしています。

黙示録3章5節 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。

いのちの書に名前があるということは非常に大切です。なぜなら、最後のさばきで、「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれ」〔黙示録20章15節〕るからです。このように、「勝利を得る者」ということばは、最後に火の池に投げ込まれないすべての人に当てはまります。なぜなら、彼らだけが「世の初めから」ほふられた小羊のいのちの書に」〔黙示録13章8節〕名が残っている人々だからです。来るべき獣の支配を通して、その時代に生きている信徒は、いのちを犠牲にしてさえ〔黙示録13章15節〕、獣を拜まないことで彼らの勝利した信仰をも表わします。どの時代でも、勝利を得る者はキリストを人の前で告白するのを恐れない人々です〔ルカによる福音書12章8節〕。しかしながら、「おくびよう者」は、火の池に投げ込まれるのです〔黙示録21章8節〕。

しかし、いのちの書から名を消すとはどういう意味でしょうか。ある人々はしばしの間だけ救われて、さばきの時に永遠に失われることになるのでしょうか。これが名を消すということばの最も明瞭な意味のように思われますが、このような解釈は、聖書の他の多くの箇所〔ヨハネによる福音書10章28、29節、ローマ人への手紙8章35、39節のよう〕と矛盾します。これらの箇所は、本当に救われた者は永遠に救われていると明らかに教えています。

これは論争の余地のある所ですが、「説明責任」をとれる年齢に達する前に死んだ幼児の特別な情況に注目することによって、可能性のある調和が出来るのです。いのちの書には、その名がまさに意味しているように、キリストが身代わりに死なれたすべての人の名、言い替えると、今まで妊娠し、創造主が創造されたいのちの霊を受けたすべての人の名が記されています。キリストはみごもったすべての人に受け継がれた生まれつきの子のためには死なれたのですから、故意にまたは自覚して罪を犯すようになる前に死んでいる子供は、罪から救われる必要はないのです。幼児は決して故意に罪を犯していないし、キリストは子供が受け継いだ生

まれながらの罪のためになだめの供えものとなられたのですから。けれども、子供が自覚して罪を犯すようになる時、その時から後は失われたものとなり、救われる必要があるのです。したがって、彼は「新しく生まれる」必要があります。彼の名は、なお、いのちの書に書かれています。なぜなら、彼はなお生きていますし、死ぬ前にキリストを救い主として信頼するなら、キリストは彼に永遠のいのちを与える可能性があるからです。しかしながら、もし彼が罪を犯し、死ぬまで罪を悔い改めないで赦されない状態にとどまり続けるなら、その時、彼の名はいのちの書から消されて、もはや呼び戻しのきかない状態になります。そして、彼は肉体の死と同様に第二の死〔黙示録20章14節〕を経験するのです。

救いと永遠のいのち〔ヨハネによる福音書10章28節〕のために主イエス・キリストを信ずる人々は、主が許される彼らが経験するかも知れないどのようなテストにも、実際に打ち勝ちます。彼らの名はいのちの書から消されることなく、それゆえ、主イエス・キリストは父なる創造主の御前で彼らの名を認めることができるのです。

黙示録3章6節 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。

サルデスのような教会に対してさえ、聖霊は悔い改めて信仰を復活させるようにと、人々を招いているのです。信仰と実践の両方が形だけになっている人々と信仰を告白しているわずか一握りの人々だけが、本当にキリストの名を信じて永遠のいのちを持っています。このサルデスのような教会でさえ、従順な信仰をもって、真心を持って聞くことを強調して、主が言われたのです「わたしのことばを聞く者」は、「死からいのちに移っている」〔ヨハネによる福音書5章24節〕と。

天に開かれた教会

七つの教会のうち二つだけが、主からの明瞭な叱責を受けないで活動し奉仕していました。これら二つの教会は世的には小さく弱い教会でした。最初はスミルナで証のためひどい迫害を受けていた教会で、また後者は、フィラデルフィアの教会で、全体にゆきわたった背教と不信の最中で、忠実なあかしを保ち続けていました。

黙示録3章7節　また、フィラデルフィヤにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持つている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がなく、その方がこう言われる。』

よく知られているように、フィラデルフィヤということばは「兄弟愛」を意味し、このことばは少し異なる形で新約聖書に七回用いられ、ローマ人への手紙12章10節にあるようにクリスチャンの美しい特質に触れています。その町は、ペルガモの開設者アッタロス王が彼の兄弟を覚えて、フィラデルフィヤと名づけました。フィラデルフィアはサルデスの南東三十五キロメートルの所にあつた。フィラデルフィヤは今日こんにちなおアラシエヒル（トルコ西部、イズミルの東にある市で人口三十七万人）として生き残っています。「訳者注：イズミル（トルコ西部エーゲ海の入江イズミル湾に臨む港湾都市、200万・旧称スミルナ）」

まず第一に、この教会に対するキリストの挨拶は、黙示録1章の導入部の記事に戻るものではありません。このことは、教会のかしらであるイエス・キリストに対する他とは明らかに異なるふさわしい態度に基づいて、この特殊な教会に対する他とは異なる新しいメッセージを示唆しています。第一に、主は、御自身のまたとない、ほんとうにきよい真実な御性質を強調しています。定義からしても、主がなされることは正しく、言われることは真実です。「まことに主のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である」〔詩篇33篇4節〕。創造主の至高の教義は、キリストのための純心な証すべての基礎であり、フィラデルフィアの教会は、このことを認めていたのです。

キリストのご性質についてこのような考えを持っていて、教会は、すばらしいあかしを効果的にする準備が完全に整っていました。真理ときよさは、相伴わなければならぬからです。健全な教義は常に創造主を敬う行為を生み出し、これに反して「友だちが悪ければ良い習慣がそこなわれる」〔エペソ人への手紙15章33節〕。したがって、キリストは証と奉仕のとびらを開いたり閉じたりできるのはキリスト御自身だけであることを彼らに保証しています。

この言及はイザヤ書22章22節の「わたしはまた、ダビデの家のかぎを彼の肩に置く。彼が開くと閉じる者はなく、彼が閉じると開く者はない」に対するものです。旧約聖書でこの約束は、ヒゼキヤ王の高官で忠実な僕しもべであったエルヤキムに特に与えられたものです。エルヤキムの前任者シェブナは、奉仕で不忠実なことが証明されたので、創造主は彼の地位をエリアキムに与えると約束されました。「ダビデの家の鍵かぎ」は、特にユダヤの王たちの宝物庫の鍵かぎに言及したものです。象徴的にそれはまた、行政の大きな責任すべてに対する言及です。そして、統治の一切の責任は、鍵によって第一宰相としての責任と本質的に同じ職務にある彼

に置かれたはずで。エルヤキムはただ一人、王のもとにあつて、責任があつたはずであり、統治は、肩からぶらさがつた重い鍵束かぎのように、彼の上におかれていたはずで。この同じ預言的約束がイザヤ書9章6、7節で、やがて来る救い主になされてきました。統治は彼の肩に置かれるはずであり、キリストは永遠にダビデの家の王座に就くはずで。

このように、エリアキムはヒゼキヤ時代のエルサレムの人々に、やがて来るメシヤの実際に目に見える型として提示され、その肩の上に創造主がいつの日か全世界の王権を永遠におかれます。フィラデルフィヤの教会に対して、キリストは、エリアキム（エリヤキムの名はまさに創造主が生き返らせる」を意味します）を通して八百年以上前になされた型が約束通り成就した原型であると主張しています。キリストはすでに死とハデスの鍵かぎを持っており（黙示録1章18節）、それに加えて、ここでは地上の王国に対する鍵かぎを持つと主張しています。キリストはすべての鍵かぎを持ち、したがって、彼だけが扉を開いたり閉じたりする能力と特権を持っています。

黙示録3章8節 「わたしは、あなたの行ないを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があつて、わたしのことばを守り、私の名を否まなかつたからである。

すべての扉の鍵かぎを持つ主イエス・キリストは、彼らがどんなに努力しても閉じることのできない扉をフィラデルフィヤの教会の人々のために、開け続けることを選んでおられます。フィラデルフィヤの教会の扉は閉じられることはなく、牢獄の扉も彼らを閉じ込めておくことはできず、地獄の門も彼らに打ち勝つことはできず、そして創造主の宝物庫自体は彼らに開かれています。確かに、証あかしと奉仕の扉は、彼らが忠実である限り彼らに開かれているのです。

この発展的な約束の理由は、「私はあなたの行ないを知っている」にあるのです。この手紙にだけ、彼らの行爲は何も述べられていません。すなわち、彼らがどうあるうとも、彼らが主を喜ばせているのは確かです。彼らが主を喜ばせている理由は、キリストにだけ力を見出し、主のみことばだけを信じ、そしてその生活態度をキリストの御名にだけ、置く、という心と生活態度から発しているのです。

「少しばかりの力」とは、「ほとんど力がない」という元来の考えを事実上伝えています。教会になお少しばかり力があつて、したがって、ある程度の働きをまだなし得るといふことではないのです。むしろ、教会にはほとんど力がないという事実こそ、それ自体が教会の力の源であり、それ故に、完全に主により頼まなければならぬことを意味します。主は、「私の力は弱さのうちに現われる」と言っています（『IIコリント人への手紙12章9節』）。富も感化力も宣伝用の計画も説教壇での雄弁も、教会の演奏者たちの調和のとれた音色も、効果的手段にはならないのです。主だけが扉をあけ、主のみが成長させる（『Iコリント人への手紙3章7節』）のです。

さらに、フィラデルフィヤのような教会は、創造主のことばを守ります。創造主のことばを恥じ、主のことばを変更し、みことばを薄め、創造主のことばを寓話化し、創造主のことばをまさに無視しようとする圧力は、常に巨大で、多くの信徒はこれらの圧力に屈して、何世紀にもわたつてそのあかしをやむやんしてきました。現代の背景は、数えきれないほどの妥協を生み出す圧力で満ち満ちており、多くの教会は、今日あれやこれやの圧力に屈しています。聖書は警告のことばで満ち満ちています。「ゆだねられたものを守りな

さい」「エテモテへの手紙6章20節」、「健全なことばを手本にしなさい」「エテモテへの手紙1章13節」、「信仰のために戦うよう」「ユダの手紙3節」、「しつかりとした土台の上に堅く立って、信仰に踏みとどまらなければなりません」「コロサイ人への手紙1章23節」と。

教会がキリストのことばを大雑把に取り扱い始めると、遅かれ早かれキリストの名を否むようになります。人の名はその人の特質、地位、働きを表わします。それは彼の存在と行為のすべてです。それゆえ、キリストの名についての概念は非常に大切です。新約聖書だけでもキリストの名に関する言及は百二十五か所もあります。

キリストの正式の名は「主イエス・キリスト」〔使徒の働き2章36節を参照です。イエスという名は救いを意味します。そしてイエスという名を尊ぶ人は、身代わりとしての贖いと、義とする復活によって準備された大いなる救いを受け入れます〔使徒の働き4章12節〕。キリスト(すなわち油注がれた者)という名を尊ぶ人は、キリストの人格すなわち、創造主に油注がれた預言者、祭司、王としての三重の立場を認めるのです。キリストを主として尊ぶ人は、キリストのことばを信じ守ります。

力がほとんどないが、キリストのことばを守って、キリストの名を認める人々に対して、キリストは、だれも閉じることのできない扉を開いておくという驚くべき保証を与えています。それとは逆に、自分の力と自分の知性と自分の影響力に頼り、そのゆえに、主の力と主のことばと御名を拒絶する者に対しては、彼らが無理に開けておこうとする扉がまもなく閉じられます。なぜなら、彼らより大きな力と機知と重要性を持つ他の人々が常にいるからです。

黙示録3章9節 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそつでなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。

他に、スミルナとフィラデルフィアの二つの忠実な教会が共通して経験したことは、いわゆるサタンの会衆に属する偽りのユダヤ人からの反対でした〔黙示録2章9節の注釈を参照〕。他の教会を悩ませた偽りの使徒や偽りの預言者は、この二つの教会には入り込むことはできませんでしたが、ユダヤ主義者や見せかけの祭司、儀式尊重主義者は問題でした。しかしながら、真の信者は、正しいことが立証されるはずで、自分たちへの神的礼拝を切に願ったこれらの律法学者たち(天使でさえ足下にひれ伏して礼拝するのを許さなかったのに。黙示録8、9節を見よ)が、彼らの面前で膝をかかめておじぎするように強要した時、確かに真の信者は、彼らを礼拝しないで、むしろ贖ってくださった恵み深いキリストを礼拝します。このような、偽ユダヤ人に対する救いの約束ではなく、罪に定めるものです。この約束の成就是、おそらくピリピ2章10、11節で明確に詳しく説いている大いなるさばきの集りです。

黙示録3章10節 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試験の時には、あなたを守ろう。

この節は重大で、何か論争の余地がある節です。フィラデルフィアの教会で例証されているように、信仰

にある教会の患難期前携拳の教義を支持する鍵になる節の一つです。「あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう」【黙示録2章10節】というスミルナに対する約束に何か似ています。両方共に、来ようとしている患難の時にいついて語っており、それに続く栄光に比べ、期間が短いことが強調されています。しかしながら、前者は悪魔によって引き起こされたもので、教会が経験するものであり、後者は主によって来るもので、地に住む人々が経験するものです。

両方の教会は、主のことばを守り、患難のさなかにあっても忍耐し、主に忠実であるすべての教会を表わします。彼ら会衆の多くの者は、死をさえもたらすある種の患難に耐えるように召されているのです。「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです」【ペリビ人への手紙1章29節】。これはキリストと追従者たちに対する、世と悪魔の長年続いた敵対のゆえです【ヨハネによる福音書15章20節、16章33節】。

しかし、地上に来る裁きの受難の時期もあります。その受難の目的は、教会を試みるためではなく、地に住む人々を試みるためです。それはここ黙示録に記された七年に過ぎません。そのさばきは小羊が封印を解く時【黙示録6章1節】、天使がラツパを鳴らす時【黙示録8章2節】、創造主の怒りの鉢が地上に向けてぶちまけられる時【黙示録16章1節】に來ます。これらのさばきの目的は、サタンに教会を試みるのを許されるためでもなく、キリストのために教会をさばくためでもありません。(キリストの教会に対するさばきは、地上ではなく、キリストの裁きの座で行なわれます)。

それゆえ、この約束は、明らかにやがて来るさばきの時からフィラデルフィアの人々を救出することを約束しているように思われます。この約束された救出はスミルナのように死によってなされるとは示唆されていません。そして、彼らが、裁きの時を「通り抜けて」救い出されるといふのは言い過ぎです。

地上に住む人々を試みるこの最後の大きいなる試練の結果として、この大きいなる患難を通して、大勢の人々が信者となるでしょう【黙示録7章14節】。しかし、獣の像を拝まない者を皆殺しにした【黙示録13章15節】結果、これらの信者の大多数は、殉教の死をとげるので、彼らが患難から救い出されるとはとも言えません。

それゆえ、この節から引き出されるただひとつの筋の通った結論は、真の信者は、キリストがやがて地を裁かれるときキリストご自身によって救出されます。その時、キリストは、彼らがキリストと共にいるように、復活または携拳によって取り去るといふ長年にわたる約束を果たすために帰って来られるのです【ヨハネによる福音書14章2、3節、1コリント人への手紙15章51、53節、ペリビ人への手紙3章20、21節、1テサロニケ人への手紙4章16、17節他】

患難期後携拳論者はこの結論を拒否し、最後の世代のクリスチャンたちが、大患難から逃れるにふさわしい理由は何もないと反ばくしています。けれども、事実は他のすべての時代のクリスチャンたちが大いなる患難から逃れており、したがって、最後の世代のクリスチャンたちが、大いなる艱難に参加するため選り出される理由もないのです。最後の教会を含めて、どの時代のキリストの教会も、サタンから来る患難に会わなかった教会はありませんが、キリストが地から汚れを取り除くためやがて来られる時、世とともにさばかれる教会は一つもないのです。大患難時代に救われた人々でさえ、彼らは迫害を受けますし、ある人々は、サタンとその追従者のゆえに死ぬことさえありますが、この期間の他の人々のように創造主の御怒りの対象ではありません。

黙示録3章11節 わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていていなさい。

フィラデルフィヤのような教会が、まだ活動している間に帰って来るといふ主の約束は、ちょうどテアテラとサルデスの場合のようです。不品行なテアテラの教会は大患難に投げ込まれる〔黙示録2章22節〕し、サルデスは知らないうちに大患難に巻き込まれます〔黙示録3章3節〕が、忠実に注意して待ちつつ主に仕えているフィラデルフィヤの教会は、やがて来る試みの時から救われるはずです。

フィラデルフィヤの教会は忠実でしたが、特に頑強な反対に直面し、そのために、後戻りする危険性が常にあり、堅く保たなければならぬ警告なのです。「いのちの冠」は、死に至るまで忠実な人々に約束されていましたが〔黙示録21章10節〕、自分の報酬を失う可能性は常にあるものの〔1コリント人への手紙3章14、15節〕、救いを失うことはないのです〔ヨハネによる福音書10章28、29節〕。

黙示録3章12節 勝利を得る者を、わたしの神（創造主）の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上になわたしの神（創造主）の御名と、わたしの神（創造主）の都、すなわち、わたしの神（創造主）のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。

今建てられつつある霊の宮で、新しい信者はみな生ける石〔エペソ人への手紙2章19～22節、1ペテロの手紙2章5節〕なの

です。けれど、新しいエルサレムでは、「創造主である主と小羊とが都の神殿」〔黙示録21章22節〕であり、勝利を得たクリスチャンは、永遠に神殿の柱となります。その衣装は栄光に満ちた身分を証明する三つの印で飾られています。すなわち、(1)救い主なる創造主の御名、(2)天国の市民権、(3)彼自身の特徴を示す新しい名であって、それはキリスト御自身によって選ばれ、彼に授与された名です〔黙示録2章17節〕。

黙示録3章13節 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。

各々の教会に対するすばらしい一連の啓示に注意してください。主はヨハネに語り、ヨハネは教会の天使に書き、その天使は何らかの方法で各々の教会に伝達します（1コリント人への手紙13章1節の「天使のことば」と1コリント人への手紙14章32節「預言者の霊」ということばに含まれる意味に注意してください）。そして、これらのすべての情報は、七つの教会へ宛てたヨハネの包括的な手紙にまざり合っています〔黙示録1章4節、22章16、21節〕。しかし、情報が最終的に教会に届いても、教会に語っているのは、聖霊御自身以外の何者でもないのです。

中立的教会

七つの手紙の終わりはラオデキアの教会に対するものです。ラオデキアはフィラデルフィアの南東七十二キロで、エペソの東およそ百六十キロの所にあります。ラオデキアは実に豊かな貿易の中心地で、ラオデキ

アの教会員はその富にあずかっていました。外見上、ラオデキアの教会は、七つの教会のうち最も強い印象を与えますが、霊的には最もひどい状態にあったのです。

黙示録3章14節 また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神（創造主）に造られたものの根源である方がこう言われる。

フィラデルフィアの場合と同様に、ラオデキヤの人々に対する最初の挨拶は、第1章にあるキリストの描写では記述しがたいものです。そして特に、ラオデキヤで承認を必要としているこれらの属性に注意を促しています。世的成功のゆえに、教会は真の霊的必要に無関心になっていました。創造主のことばの絶対性と無比な権威を疑って、あの時代の知識階級の間中心の哲学の多くを受け入れていたのです。パウロが三十年前に書いたコロサイにある隣接した教会は、当時でさえ、このような思考の影響を受けており、パウロは人から出たあらゆる哲学に注意するように、彼らにしつこく警告していました〔コロサイ人への手紙2章8〜10節〕。さらに、過去と現在のすべてのまやかしの哲学は、創造主の創造の御業に対する、またとない卓越性を否定する進化論に基づいています。それゆえ、パウロがコロサイ人にしたように、主イエス・キリストは、ラオデキヤの人々に対するご自身のメッセージで、彼らが以前に信仰を言い表わした真の聖書の創造論の特有な基本的特徴を彼らに思い起こさせ、創造の始めであったキリストこそ、天と地にあるすべてを創造された創造主ご自身なのです〔参照…コロサイ人への手紙1章16〜19節〕。キリストはアルファ（ギリシャ語のアルファベットの最初の文字）であったばかりでなくオメガ（アルファベットの最後の文字）でもありました。アーメン。すべて

はキリストのものであり、キリストのためであり、キリストのことばは真実で信じるに足るものです。

ラオデキヤの妥協的中立と自己中心は、今日こんにちのいわゆる多くの福音派教会の特徴です。そして、彼らは、ラオデキヤの教会のように、真の創造主義と真の聖書の権威を信じる信仰に、そして、真の創造者であり忠実な証人であるイエス・キリストを信ずる信仰に立ち返らなければならなかったのです。

黙示録3章15節 「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。

ある意味で、ラオデキヤはサルデスよりよい教会でした。ラオデキヤはとにかくなまぬるかたが、サルデスは冷たく、死んでいるように見えました。それなのに、主はサルデスのように冷たい方がむしろよかったですと言います。現代風に言うと、死んだ正統派の教会は榮えてはいるが、中立的福音主義の教会よりもよいのです。

ラオデキヤの教会は、完全に背教に陥っている教会ではなかったのです。すなわち、その燭台は取り除かれていなかっただし、主はなお、その燭台の真ん中におられました。多くの教義的に健全な教会が、サルデスの教会のようになっていくのに、不毛でもなく、冷たくもなかったのです。見たところ多くの新しい会員を受け入れているようで、しかも、大きな榮えた会衆となり、感動的な施設と活動的なプログラムを持っていました。しかし、教会は議論の余地ある問題に関しては、中立的立場に立つ道を捜し求めていました。右にも、左にも偏らないで、自由に対話が出来、権力者と富者とインテリ層に認められるためでした。

創造主の重要な真理、創造と創造主のことばに対しては冷たくなかったが、教会は確固たる立場もとらず、真のあかしを宣言しようとしなかったのです。そして、キリストは、驚くべき事を言われました。もし、彼らが熱くなりえないなら、むしろ冷たくあつてほしいと。

黙示録3章16節 このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

主イエス・キリストは、他の人と同様に、熱い飲み物か、冷たい飲み物を喜ばれ、なまぬるい飲み物を欲しがりません。キリストは彼の反応を描写するのに絵画的言語を用いました。「私は：文字通りには（まさに口から吐き出そうとしている）：口から吐き出そう」です。このような教会を放り出すというキリストの決断は、最終的なものではありませんでした。なお悔い改めと信仰回復の余地はありますが、事態は容易ならぬものであったのです。

今日こんにちこのような教会の数は、無数であり、冷たくて死んでいる教会よりも、これらの教会は、キリストの大目的達成のためにより大きな妨げとなるのです。冷たく、死んだ教会にはだれも行かないので、だれをも傷つけません。しかし、中立的教会（すなわち中庸を行く教会、折衷する教会、歩み寄る妥協的教会）には多くの人が来ます。それらの人の気質は、いずれにしても便宜主義を好み、説得力のある偽善をもって便宜主義を追い求めます。少しの宗教心はよいが、熱狂的になるのは避けなければならぬと言ふ。さらに、彼らは熱い教会にひどく腹を立て、彼らの熱心さを冷やすためにできるすべてのことをし、彼らの確信を薄めようとします。彼らは、彼らの教義的信念と宣教の熱意の欠如を譴責けんせきされるので、熱心な人々のいる教会にはとどまれないのです。

黙示録3章17節 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

このようなことばは、多くの人々の氣に障りさわ、いらいらさせます。その上、これらの節の多くの注解者は、このような中立的教会の出身であり、同時に、他の妥協的なキリスト教の研究機関や団体から来ています。このような注解書は、この節を近代主義者や背教の教会に、そして、聖書の靈感、キリストの処女降誕、身代わりの贖いや、他の基本的教義を公然と否定し、拒否している教会に当てはめています。中立的著者たちは、これらのような非難を撥ねつける方法を容易に見出し、またそれが、彼らの良心を慰めます。しかも、始終キリストが言われるように、キリストが語りかけている「汝」（ギリシャ語では強調形が用いられている）が、彼らを指すことを彼らは知らないのです。だれの目にも明らかかな自由主義の教会は、聖書の意味では全く教会ではありません。彼らは燭台を持っていないし、キリストが語りかけているのは彼らではありません。キリストがここで話している教会は、中立的教会なのです。

通常、保守的、福音的またはカリスマ的、時には根本主義者と自称しているこのような教会は、大きな会堂を持ち、外見を飾るプログラムを持ち、自分自身良い印象を受けているかも知れませんが、それでも、もし真の創造論と、あらゆる面で聖書の完全な無謬性と權威にしっかりと、熱心に立っていないなら、創造主

でありことばであるキリストは、彼らに耐えられないほどの不愉快さを見出し、彼らを吐き出すと言って警告しているのです。

黙示録3章18節 わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。

「不思議な助言者」〔イザヤ書9章6節〕である方は、教会のなまぬるい便宜主義にもかかわらず、なおこの教会を愛しています〔19節〕。それゆえ、キリストは、彼らの絶望的な、彼らが認めていない必要に関する助言を、愛をもって与えています。「私より買え！」とキリストは言われます。しかし、彼らのすべての富をもってしても、彼らが必要とするものを買うことはできません。「金も代価も払わないで」〔イザヤ書55章1節〕買いなさい。購入の価は、彼らのみじめな状態を認めて、悔い改めてキリストのもとに来るだけです。そして、彼らの富を捨てて、真の富の称賛を（信仰は火で精練される〔1ペテロの手紙1章7節〕）、世の知恵を捨ててキリストにある真の知恵〔コロサイ人への手紙2章3節〕を得るのです。彼らは、彼ら自身の正しさである、汚れた衣〔イザヤ書64章6節〕の代わりに、キリストの義を示す純粋な白い衣を受けなければなりません。眼軟膏が肉体の目に必要なように、彼らの霊的盲目は「創造主を知るための知恵と啓示の御霊」によって和らげなければなりません。そして「あなたがたの心の目がはつきり見えるようになって、神（創造主）の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか」〔エペソ人への手紙1章17、18節〕を知ることができるようになるのです。

るようになるのです。

黙示録3章19節 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

ラオデキアの教会のなまぬるい妥協的クリスチャンも、実際にクリスチャンであることは明らかです。そうでなければ、キリストは彼らを譴責〔けんせき〕したりこらしめたりしないはずです。「主はその愛するものをこらしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」〔フル人への手紙12章6節〕。主はそのこらしめが、どのような結果になるかを示していませんが、世の一般大衆に、彼らの霊的貧困と裸をさらけ出すことも含まれるはずで、彼らは世の大衆の心に印象付けることを非常に気にしていたのです。「裸の恥があらわれること」は、確かにこのように傲慢で知的教会にとって、最もひどい懲らしめになるはずで、しかし、キリストは彼らを愛し、彼らが悔い改めることを望んでおられます。

黙示録3章20節 見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

ここで主は異なる挿し絵を同じ目的で用いています。キリストの譴責と懲らしめは、人が扉をたたくのに似ています。もし人が、キリストが戸をたたく音を聞き、または、彼の懲罰の経験を通してでも、書かれた

キリストのことばを通してでも、キリストの声を聞くなら、人に応答するようにキリストは強制しなくても、応答すべきです。キリストは強制的に戸を開けることはありません。中にいる人が戸を開けなければなりません。すなわち、彼は自分の誇りと自己満足、人間的知恵と臆病な中立的立場を悔いなければなりません。その時、それまで経験したことのない、主との真の交わりによる本当の喜びを知るのです。

この勧告は、ラオデキアの教会と今日の多数であるこのような他のすべての教会にいる妥協している世俗的信者に向けられています。このことばは、未信者に対して向けられた福音の招きのことばではありません。しかし、福音の招きのことばとして今日広く用いられています。この節は次のような福音のメッセージ、すなわち、身代わりの贖い、キリストの復活、悔い改め、キリストの人格と働きを信じる信仰については、何も述べられていません。また、近くにある文章の前後のどこを探しても、これらの極めて重要な事柄について書かれてあるところはありません。それなのに、伝道者や働き人がどこでも、通常、この節を福音の招きのことばに用いています。創造主は、恵みのうちに、救われていない人々をキリストに導く助けに時たま用いています。この節は創造主の招きに心を開く適切な態度を命じているためですが、この節は救われていない人に対する福音を意図してはいません。このことばは、妥協的なまぬるい教会にいる、妥協的でまぬるいクリスチャンに宛てられていたので、キリストが御自身のもとに引き戻そうとしているのは彼らなのです。

ここにはさらに大切な真理があります。前の三つの手紙で、キリストは、信じる者にさばきか祝福のために、キリストの差し迫った来臨を期待し準備するように促しています。その文脈で、なまぬるいラオデキアの人々は、主が来られる準備をするのと同じように期待されています。キリストが戸の外に立ってたくのは、キリストのことば（私の声を聞いて）に照らして、預言の成就と世界の出来事の形をも取っています。以上見て来たように、なまぬるい妥協的な兄弟でさえ、奮い立たされ、主を探し求め、主のことばを信ずるようになるかも知れません。

したがって、「わたしは戸の外に立ってたく」と言われる時、主ご自身が地上に戻ってこられる時が差し迫っていることにも言及しているのです。そこである日、実際に、キリストは文字通りご自身の民と食事をします。それは小羊の大いなる婚宴の席です〔黙示録19章9節〕。「そのように、これらのことすべてを見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」〔マタイによる福音書24章33節〕。

黙示録3章21節 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

これは驚くべき恵みの表現です。御口からまさに吐き出されようとしていた人が、御座に彼と共に座るようにと招かれるのです。主が死に至るまで忠実であったとき、キリストは死人の中から甦よみがえらされました。そして主は父なる「創造主の右の御座に着座されました」〔ヘブル人への手紙12章2節〕。同様に、キリストに属する人々は、主が御座につかれた時、最初はキリストの千年期の御座〔黙示録20章4節〕で、そして最終的にはキリストの永遠の御座〔黙示録22章3、4節〕で、キリストと共に治めるのです。

勝利を得る者に対する七つの約束のすべてに特徴があることにもう一度注意して下さい。その特徴は、未来に関する描写で再び述べられていて、そこですべては成就されます。そういうわけで、いのちの木はエペ

ソの人々に約束され〔黙示録22章2節〕、スミルナの人々には第二の死からの救出〔黙示録20章6節〕、ペルガモの人々には書かれた新しい名〔黙示録22章4節〕、テアテラの人々にはあけの明星〔黙示録22章16節〕、サルデスの教会の人々には白い衣〔黙示録19章8節〕、フィラデルフィアの教会の人々には新しいエルサレム〔黙示録22章2節〕、そして、ラオデキヤの人々には彼の御座に共につかせる〔黙示録20章4節〕ことが約束されています。

黙示録3章22節 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。

七つの手紙はこの勧告を七回繰り返して結んでいます。全く同じ命令を、このように七回繰り返しているのは、その命令が特に重要なことを強調しているのです。私たちが、これら七つの教会に対するメッセージを読んで、心にとめることは大切です。それらの教会が直面したのと同じ問題に私たちの教会も直面します。そして同じ警告と約束が、彼らと同様に私たちにも当てはめられます。

この節は、黙示録の最後の章までで教会について言及した最後の節です。ヨハネは最後の章で、聖書のすべての書が教会に与えられているはずだと気付かされました〔黙示録22章16節〕。黙示録4章から後に書かれているさばきのクライマックスの出来事を通して教会は地上にありません。したがって、これらの章は教会に対する言及ではありません。しかし、すべての章〔黙示録1章4節〕は、キリストの教会に属するすべての人へのメッセージであり、私達^{たち}は、このメッセージに直面しているのです。